

青丘文庫研究会 月報

No.253

2011年5月1日

青丘文庫研究会 〒657-0064 神戸市灘区山田町3-1-1 (財)神戸学生青年センター内
 TEL 078-851-2760 FAX 078-821-5878 <http://ksyc.jp/sb/> e-mail hida@ksyc.jp
 ①在日朝鮮人運動史研究会関西支部 (代表・飛田雄一)
 ②朝鮮近現代史研究会 (代表・水野直樹)
 郵便振替<00970-0-68837 青丘文庫月報>年間購読料3000円
 ※他に、青丘文庫に寄付する図書の購入費として2000円/年をお願いします。

第280回朝鮮近現代史研究会 (2011. 3. 13)

「南北分断の端緒・1945年春～夏、半島南部で行われた朝鮮軍の 「本土決戦」準備－韓国KBSの番組DVD鑑賞と解説－」 塚崎昌之

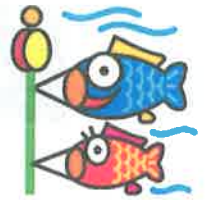
2009年8月16日、韓国KBSスペシャルで「1945年韓半島は日帝の決戦基地であった」が放映された。その年の冬に2回にわたり放映された済州島の日本軍施設の番組の続編といえるものである。報告者はそれらの番組作成に資料提供・現地調査などで協力した。

アジア太平洋戦争開始後、1944年春までの朝鮮半島は「無風地帯」であり、兵站基地と位置付けられた。しかし、1944年春になると、朝鮮軍も急に慌ただしくなっていく。この頃には南方からの輸送船も途絶しつつあり、大陸・朝鮮からの物資、人的要員の「確保」・輸送は戦争遂行上、重要な課題となった。しかし、日本近海には米潜水艦が出没するようになり、また、中国四川地方から北九州に向けてのB29空襲も始まり、朝鮮海峡の上空を通過した。朝鮮海峡の航行の確保は絶対に必要なことであった。

1944年12月に陸軍防衛総司令部は、済州島－木浦－麗水間の地域に築城、船舶航行並びに泊地を掩護する臨時砲台、舟艇基地の設定を指示した。また、海軍も木浦、巨文島、統営、麗水に特攻基地を設ける計画を持ち始めた。麗水には水上航空基地も作られ、司令室や通信室、燃料庫などの多くの地下施設が掘削されたが、その労働力には朝鮮人の囚人も使われた。

1945年2月に、朝鮮軍は守備作戦を担当する第17方面軍と管区部隊で軍政を担当する朝鮮軍管区に分けられたが、第17方面軍には二つの任務が与えられた。一つは予想されるソ連の侵攻に関しては関東軍の区処を受けること、もう一つは朝鮮の作戦準備の重点は朝鮮南部に置くことであった。3月末には、朝鮮での「本土決戦」の作戦である「決七号作戦」が発令された。米軍の上陸予想地帯は済州島を除くと、半島南西海岸の群山周辺7カ所とされた。150師団(司令部一井邑)、160師団(裡里)が拘束兵团として新設され、海岸部では前進陣地、少し内陸に入った場所では主抵抗陣地の築城が始まった。主抵抗陣地として多くの兵員壕、トーチカなどの地下施設が作られていたことが現地調査で確認できた。その後背地には米軍が上陸した地点にすぐに駆け付けられる機動兵团として320師団(全州)が置かれた。

それとともに最後の抵抗拠点・複層陣地として、大田－尚州－居昌の区域が想定され、朝鮮軍(方面軍・軍管区)司令部も大田に移動できるように地下施設も用意された。総督府と軍政を一本化し、朝鮮最後の皇太子であった李垕をその地位につける要望も陸軍から出された。軍の移動だけでなく、長期抗戦を想定して、仁川造兵廠や日本製鉄の工場の移転や鉄道の移設まで計画されていた。軍需品の集積も大田－尚州－居昌のほぼ中央にある永同で行われ始めた。永同では現在89本の地下壕が残されている。敗戦時に済州島を除く朝鮮軍の管轄下で弾薬・燃料を一番多く集積していたところが永同であったことから、永同



が最後の抵抗地点として想定されていたことは明らかである。これらの決戦準備には、「野戦勤務隊」として多くの朝鮮人「兵士」が労働力として動員されたと同時に、鉾山技術者や一般労働者が総督府を通じて動員されたが、その規模は不明である。

朝鮮半島は直接の戦場となることなく、日本の敗戦を迎えた。その時には朝鮮半島南部は朝鮮軍、北部は関東軍の管轄となっており、朝鮮軍の武装解除は米軍、関東軍の武装解除はソ連軍が行った。このことが朝鮮半島南北分断の一因となったのである。

第325回在日朝鮮人運動史研究会関西西部会(2011.4.10)

「鶴橋キャンチャルアパートの建物について」 坂本悠一



鶴橋キャンチャルアパート (いずれも高仁鳳さんのホームページ <http://www.inbong.com/> より)

私がこの建物を初めて足を踏み入れたのは、去る2月14日、日本研修の一環として、大阪のコリアンタウンの踏査に学生を引率して訪れた勤務校の姉妹大学である韓国の霊山大学の崔永鎬教授の誘いによるものである。地元の「猪飼野探訪会」をはじめ、塚崎昌之さんらのフィールドワークでは、定番のコースとなっていたことも、後で知った。この日は、「猪飼野の歴史と文化を考える会」代表でつい最近出版された『ニッポン猪飼野ものがたり』(批評社刊)を編集された足代健二郎さんがガイドであった。

全く予備知識なしであったから、約百年前(1913年)建築の元警察署が、5年まで現役のアパートとして使用されていたこと自体が驚きであったし、朝鮮人の独立運動を弾圧していた建物に、ニューカマーを含めて多くのコリアン(家主の話では最終段階で約6割)が生活していたというのも、この地ならではのことも感嘆した。もうひとつ、アパートの玄関には「三谷・神崎生活相談連絡所」(三谷秀治は共産党の元大阪市議・神崎俊雄は元同党大阪市長、両氏とも後衆議院議員)と書かれた古い木製の看板が掛かっているのにも、



目を引かれた。ところが、この由緒ある建物がこの5月16日から解体されるというのである。(そのため今回の報告はすでに決まっていた順番を、厚かましくも譲っていただいた次第)。

足代さんに聞いても正確な記録はないという。そこで早速彼を誘って調査を開始することにし、まず登記簿を調べたところ、土地は1914年民有地を大阪府が買収していることが判ったが、建物については、鶴橋警察署が現在地(生野署)に移転した翌1935年中村三徳が買収、建物については戦後の1952年になって「社会福祉法人大阪盲人会」が、土地とともに取得、その後58年現在の家主の父親が経営する「有限会社新共栄荘」が買収という経緯が判明した。

建物を取り囲む赤い煉瓦塀は確かに警察署時代のもので推察されるが、内部の造作がどう見ても、警察の建物らしき痕跡がない理由がこれで解けたと思った。文献で調べると中村三徳(1873~1984)は元警察官で、池上四郎警察部長(後大阪市長)のもとで、釜ヶ崎(現愛隣地区)に大阪自彊館を建てたり、大阪毎日新聞慈善団の役員を務めるなど、「警察官三羽鳥」として社会事業に活躍した人物で、中河内郡長・八尾町長等も歴任した。1926年に大阪盲人会長に就任しており、警察署跡地には実は1936年大阪盲人会の「青十時會館」が建設され、その別館がアパートとして使用されていたのである。

問題はその建物が新築なのか、警察署の改築なのかということである。そこで、地元の町興しなどに携わっておられる六波羅雅一氏(六波羅真建築研究室)に測量と図面の制作を依頼するとともに、物証を得るため、3月22日同研究室スタッフ数名の応援を得て、棟札搜索を行ったところ、六波羅氏のねらい的中2階小屋裏のほぼ中央に「昭和11年9月28日上棟・青十時會館」と書かれた棟札が発見された。これで、別館部分に関する限り新築はまず確実で、現存建物は築75年ということが判明した。ただ、「新共栄荘」が開業する前後にほぼ全面改築されたといわれる旧青十時會館本館の部分になんらかの痕跡が残されていないか、これは解体が始まってみないと判らない謎の部分である。

以上に書いたことは、当日足代さんが口頭で概略を述べられた内容を私が代筆したもので、大半の時間は、六波羅氏の図面による建物の解説と高仁鳳さん(在日2世のアマ写真家)撮影の動画の上映であった。なお、六波羅氏によれば、当時のアパートとしては採光・通風が良好で、秀逸な建築であるとのこと(施工は鴻池組)であった。また高さんの動画は、www.inbong.comにて、全部で7編が公開されている。

さて、建物の解体は予定より早まり5月6日着工ということになった。3月23日には藤井幸之助さん率いるコリアン・マイノリティ研究会主催の見学会も行われ、20人以上が参加して盛況であったし、『大阪民主新報』5月1・8日合併号はほとんど1面全部を使って記事を書いてくれた。今後の課題は、鶴橋警察署→青十時會館→新共栄荘と変遷した建物が、この地域でどのように活用されたのか、その実態を記録と証言によって掘り起こしていくことであろう。戦前については、証言はもう伝聞になってしまうが、戦後については、足代名探偵の文字通り足を使つての努力により、いろいろな秘話や写真がすでにいくつか集められつつある。いずれも日本最大のコリアンタウンにまつわるものである。私は、1875年の江華島事件から現在に至る、アジア・韓国=朝鮮・日本・大阪・生野・鶴橋に関連した年表(当日も試作版を配布)作成に没頭している。来る5月20日には「猪飼野おとな塾」(午後6時30分から・御幸森小学校)で、今回のメンバーにさらに、塚崎・藤井両氏という強力な陣容を加えて、歴史的検証を深める予定である。そして、CD付きのブックレットとして出版できればと皮算用しているところである。





2011.1.9 青丘文庫 韓国の市民グループ「京畿市民社会フォーラム（李大洙牧師ほか）」との交流会

●青丘文庫研究会のご案内●

■第325回在日朝鮮人運動史研究会関西部会

5月8日（日）午後1時～3時

「戦前、戦後を経験した在日女性の聞き取りから
～「死生観」、「恨」～」

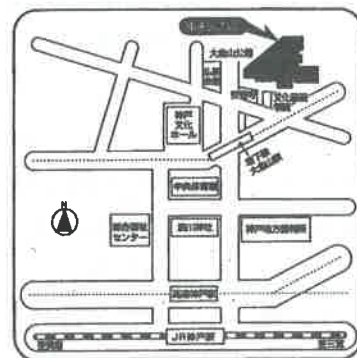
李裕淑

■第280回・朝鮮近現代史研究会

5月8日（日）午後3時～5時

「1910年代植民地朝鮮における歴史教育」 佐野通夫

※会場 神戸市立中央図書館内 青丘文庫 TEL 078-371-3351



強制動員真相究明ネットワーク・研究集会

テーマ「日本の朝鮮植民地支配と強制連行」

日 時：2011年5月28日（土）～29日（日）

会 場：神戸学生青年センター

報 告：庵谷由香、鄭惠瓊、樋口雄一、塚崎昌之、守屋敬彦

主 催：強制動員真相究明ネットワーク（神戸学生青年センター内）

【今後の研究会の予定】

2011年6月12日（日）、在日（太田修）、近現代史（未定）、7月10日（日）在日（高野昭雄）、近現代史（未定）、8月は休みです。研究会は基本的に毎月第2日曜日午後1～5時に開きます。報告希望者は、飛田または水野までご連絡ください。



【月報の巻頭エッセイの予定】

6月号以降は、坂本悠一、砂上昌一、高野昭雄、全淑美、塚崎昌之。よろしくお願いします。締め切りは前月の10日です。